

宮崎県歴史の道調査報告書

飫 肥 街 道

1978

宮崎県教育委員会

佐土原往還

(佐土原一新名爪一宮崎)

鹿児島街道

(宮崎一加納)

既肥街道

(加納一清武一山板屋一既肥)

目 次

1. 既肥街道の特色	1
2. 既肥街道の歴史	1
3. 既肥街道	1
4. 街道沿いの文化財	5
5. 写真及び古地図	2-(1)

序

宮崎県はかつては交通不便の地とされていましたが、近年急速な近代化の波を受け、古来から人々や文物の交流の舞台となった道も年々姿を変えていきます。

その道のもつ歴史的背景、道の果たした役割、道の現状等を明らかにする「歴史の道」調査を、全国にさきがけ、昭和52年度に県北五街道を実施しました。昨年に引き続き、昭和53年度は県南四街道の調査を実施し、一昔前の街並や街道沿いの交通遺跡の残存状況の実態を明らかにいたしました。

本報告書は、街道地図・街道の特色・街道の歴史・街道の様子・街道沿いの文化財や遺跡の解説からなっています。

短期間になされた調査ですので不備な点もあるかと思いますが、本県交通史の研究資料として、又、歴史の道保存のための基礎資料として御活用いただければと思っております。

最後に、資料による事前調査、実地調査、報告書作成と、それぞれお忙しいなかお骨折りいただいた調査員の方々に厚くお礼申し上げます。

昭和54年3月

宮崎県教育委員会

教育長 四 本 茂

例　　言

いるが、間道あり脇道ありで複雑をきわめるので、街道図を参照していただきたい。

1. 街道名

江戸時代にあっては、道路の規模により街道と往還を使い分けていたようであるが、現在往還は用いないのですべて街道とした。

また、志布志街道をのぞく他の街道は、厳密にいえば2ないし3往還に細区分される。

しかし、すべてをあげる必要もないのです、距離も長く中心となるものを代表させた。

2. 街道の概要説明

街道の詳細な記述は、街道沿いの交通関係遺跡の解説に譲り、ここでは街道の持つ歴史的背景、街道の果たした役割、街道の現状等を概括的に記した。

3. 街道沿いの交通関係遺跡解説

(1) 個々の解説の前半に、遺跡及び遺跡周辺の状況、遺跡と遺跡間の状況を過去から現在にわたって述べ、後半に遺跡そのものの解説を付した。

従って個々の解説をとおして読めば、起点から終点迄街道の全容が把握できる。

(2) 街道沿いの主な集落には、戸数、集落間の距離又は起点からの距離を記したが日向地誌によった。地誌は明治8年の調査をもとにしている。

(3) 集落間の距離、起点からの距離で、向里町と記してあるのは日向地誌によるもので、他は地図から割出した距離であるので正確は期しがたい。一応の目安としていただきたい。

(4) 交通関係遺跡の配列はほぼ道順に沿って

1 飫肥街道の特色

飫肥街道は、普通飫肥城下と清武城下を結ぶ山坂尾越えの街道をさすが、さらに佐土原城下までの街道を言うこともある。平部崎南が編した「日向地誌」では、志布志街道の中にくみ込まれている。

今回の調査では、飫肥を起点とし郷之原・山坂屋・清武・中村町・上ノ町・新名爪を経て佐土原に至る 10 里 14 町（約 6.4 Km）を飫肥街道として調査の対象とした。

旧飫肥藩の初代藩主伊東祐兵の父伊東三位入道義祐は、天文年間ほぼ日向の全土を従え、日薩鍋二州大守と称し 48 城を有したが、都於都城・佐土原城・飫肥城を主城とした。従って、佐土原城・官崎城・清武城を結ぶ街道、つまり、佐土原から飫肥に向う街道が飫肥街道である。

飫肥街道は、城下間に人や物資が往来するための街道、そして、藩主が参勤交代のために上り下りするための街道である。

飫肥・清武間は鶴塚山地を横断するかの如く開かれた道であるため、尾根伝いの道・山腹沿いの道である。清武・官崎間は丘陵地から平坦地へと移行する比較的起伏のゆるやかな道であり、官崎・佐土原間は官崎平野を北上する道である。

旧街道の面影をよくとどめているのは、飫肥跡周辺、国の伝統的建造物群保存地区に選定された地域、内之田の曲り追及び郷の原・清武間・そして佐土原城下入り口にあたる野久尾、一里坂などである。特に郷の原・中野間は藩主が参勤交代の際休息した花立跡のお駕籠立て場・桜や松並木道・山坂屋の番所跡・勢田岬路・清武東新町の商家町並・中野の武家屋敷通りと交通関係の史跡をいまだによく残す。

2 飫肥街道の歴史

旧飫肥街道（山坂屋の道）が開かれたのは、天正、慶長年間（1574～1616年）であり、文明16年（1481年）に都於都の伊東氏が島津氏の有する飫肥城攻略のため清武より軍勢を進めたのは、丸目・田代・北河内・郷之原を通っての道であり、当時はまだ山坂屋の道は開かれていなかつたと、平部崎南は日向地誌に記している。

飫肥を攻める伊東氏、これを守る島津氏と、天正以前は両者とも抗争のあけくれであり、道筋どころではなかったはずである。山坂屋に廻所を設け飫肥城を起点に一里塚を築いて街道を整備したのは、秀吉から再び飫肥の地を受領した伊東祐兵か、それ以降の藩主であろう。

江戸時代に参勤交代の道として、飫肥から官崎さらに細島に出るにはこの旧飫肥街道と鶴戸神宮往還の両道が使用されたが、飫肥と官崎とをほぼ直線的に結ぶ旧飫肥街道の方が近距離であるため、より多く用いられたようである。

一方、今言う飫肥街道は、明治に入ってから旧飫肥街道と平行して、或いは重複して馬車道として開発された道路である。

官崎から佐土原までの街道は平坦地を行く道で占くからあった。このことは、街道沿に残る神社や寺の創建や開基の年月、板碑や六地蔵等の建立年月によってうかがい知ることができる。伊東氏が飫肥攻略のため、都於都・佐土原の両城から軍を進めたのは多分この街道と思われるが、今のところ断定はできない。

3 飫肥街道

(1) 飫肥から郷の原へ

飫肥は 5 万 1 千石の城下町である。昭和 52 年に復原がなった飫肥城大手門空堀の右橋を渡ると武家屋敷が続く。この通りは大手門通りであり、城に近い屋敷ほど身分が

高く、石垣は切り石積、扉は板扉と立派である。

南北に伸びる大手門通りに直交して横馬場通り・県道・本町通り・前郷通りの各通りがある。大手門通りを直進し商家の連なる本町通りに出る角に明治の外交官小村寿太郎の生誕地がある。本町通りを東に進み稻荷下橋手前で左折してしばらく行くと今町であるが、ここはかつて唐人町と言わたった。この界隈は北流する酒谷川に沿った家並で、寺・商家・旅館などが軒を連ね江戸時代の面影を今に残している。

今町の通りがつくるあたり、北東に流れを発する大田川が酒谷川に流れ込んでいる。この川を渡り南東に張り出した山裾を回り込んで北上すると内之田である。内之田は明治の初め36戸の集落だったが、この近くには伊東氏と島津氏の古戦場中尾・觀音寺跡・飫肥藩の処刑地跡など史跡が多い。

今町から内之田に出る山道はかっては松並木の見事な道で、山上からは眼下を流れる広瀬川をはじめ東方に犬ヶ城・鬼ヶ城の山々が望まれる。この道を下ると内之田側から言えば登り口に觀音寺跡がある。寺跡には江戸時代の風習で間引された赤子の靈をとむらう觀音堂がひっそりと立つ。

この觀音寺跡と内之田との中間点に処刑地跡がある。現在畠地であるが、当時は荒涼とした洞原であったものであろう。首切地蔵・首洗い井戸の跡が今に残る。ここは又、飫肥城からほぼ一里の地で近くに一里塚標もあった。

内之田を北上し広瀬川を渡り大藤の集落をぬけ再び広瀬川を渡ると立野である。立野は田野・清式・宮浦からの諸道が合する地点であるため番所が設けられていた。番所跡

には現在は民家が立っている。立野から郷の原は近い。

(2) 郷の原から山仮屋へ

郷の原から清武までは、一之瀬から花立山の尾根道を北上し山仮屋の関を通って總州に出る旧飫肥街道と、坂元から黒荷田川に沿って北上し、元仮屋で旧飫肥街道に接近し山仮屋ではば合一し、後は總州まで添いつれつ行く飫肥街道の2道がある。②

旧飫肥街道は、郷の原神社前を北上し広瀬川を渡り一之瀬川原に出る。ここから道は山道にかかる。この山道を登りつめた所が標高480mの花立山がある。花立山の東南部は現在町営の牧場になっており、牧場の高所にお鶴籠立場と呼ばれる所がある。ここは、飫肥の山並や油津の港を見晴らせる眺望のよい所で、参勤交代の行列が休息をとり飫肥との別れを惜んだ場所である。

ここから山仮屋の番所までは花立山の山麓を行く道であるが、土地の者が開拓道又は林道として利用している部分しか通れない。この道は西側に広葉樹が茂り当時の街道をしのばせる。中でも800mほど続く桜の老木の並木道は素晴らしい。山仮屋の関所跡はここから近いが、この間の通行は容易ではない。関所跡は1間幅の道の右側約160mの間で、石垣と屋敷跡を残す。記録によると、13戸の番士(足輕格)を置いたようだ、現在、ほど近い所に番代を務めた掘屋窓が所在する。又、関所跡の近くには石仏や水呑場等が残る。

一方、今言う飫肥街道は、郷の原神社で左折し山際の道を北西に進む。途中、明治37年建立の道標があり、更に西に進むと坂元である。次の集落宿野は、百濟から亡命した王が田野に向う途中で一泊したと言い伝えのある所で、坂元も宿野も古くからの集落である。

街道は次の集落谷合で右折する。坂元・谷合間は舗装されているが、拡幅舗装でないので街道に沿う家並は古い。なお、宿野には道路沿いに廟宇神社や天文九年（1540）の銘の六地蔵塔の立つ墓地・王冢古墳などが存在する。

谷合から元坂屋を経て山坂屋までの1kmは曲りくねった上り勾配の道で未舗装である。しかし、側溝用のセメント管を埋め込む工事が進んでおり近く簡易舗装となる。道の上下は雜木山・杉山・密柑山などが続き石垣が所々に築かれている。人家は谷合・元坂屋間ではなく、元坂屋と山坂屋間に12戸程度断続的に所在するだけである。

山坂屋には朝倉茶屋（現在は無人）・中茶屋（現在屋敷跡のみ）があり往時は大変輒わったが、現在清武・北郷間の車の往復道にしか用いられないため閑散としている。旧軽肥街道の番所跡はここから200m程上手である。

(8) 山坂屋から清武へ

郷之原・清武間の旧軽肥街道は尾根道を上り下りして行く最短距離の道である。明治の世になり馬車道を必要とすると、これら尾根伝いの道は拡幅にむかないと、旧街道と下の谷との中間当りを新たに開削するか、元からの道を拡げることとなる。谷合・山坂屋間の道は旧軽肥街道と全く交差することも重複することもなく開かれた。しかし、山坂屋から先は、旧軽肥街道と軽肥街道が部分的に重なったり、交差したり、添いつ離れつの道となる。

山坂屋から椿山峠までの旧軽肥街道は、軽肥街道側からどこをどう通っているか、土地の古者の説明により見当をつけることはできても、道が森林化した現在では実際行くことは不可能である。ただ、軽肥街道と重複する汗道との異名をとった道筋、又、交差する椿峠あたり（ここは、花立峠と同じくお籠

立場のあった所）に旧街道の面影を見出すことができる。

椿峠を下ると最初の集落は九平、次の集落は塩鶴だが、塩鶴の名は「日向地誌」には見られない。塩鶴から勢田峠までの道は山腹沿いの道で、特に勢田の峠路は踏み固められた1m幅の道が昔のまま残り登なお高い。峠路を下ると、長明寺跡に出る。更に北進すると清武川と水無川の合流点に出る。ここには渡しがあったが幕府の巡査使到来の際は、板橋が架けられたので上使橋の渡しと言われた。現在の橋から約300m上流である。

上使橋を渡ると新町の町筋に入る。昔は八軒町とも寺町とも言われ、旅人が軒店で休息したり、買物をした所で、大正時代に鉄道が開通し西新町が形成されてからはさびれた。今なお古い家並を残している。新町の通りがつくると中野への急な坂となる。中野は清武城と真向いの地で、土族屋敷が形成された。現在街道沿いに中野神社・地頭所跡・伊東氏繁世墓・安井息軒田宅・平野鶴南生家・馬術訓練所跡等がある。

一方、今言う軽肥街道の方は旧軽肥街道の下側を行く道で、途中明治28年建設の煉瓦づくりのトンネル・汗道と言われた難所、宮崎・児湯の2郡を一望のもとに展望できると言われた椿山峠を通る。椿山峠あたりから道は舗装となる。峠道を下ると九平の集落で、次の塩鶴で旧軽肥街道と分岐し鏡州川西岸沿いに村内・小河内を経て鏡州川に出て、峠を下ると永山の大堤は大小九つの池からなり池塘修築の碑が立つ。碑文により天保14年（1833）築堤され、18歩町の水田がうるおったことがわかる。

大堤が過ぎると黒板である。ここは、左手を行く軽肥街道と右手を行く旧軽肥街道に挟

まれた集落である。鉄肥街道沿いにある黒坂⁴⁴観音堂に勢田寺から移したと言われる五輪塔と、旧鉄肥街道から移されたと思われる一里塚石柱が寺域内にある。これより約800m先で旧鉄肥街道と合一し、北郷の谷合からほぼ平行に続いた二道は一本になり、上使橋渡し、新町の町並みを通して中野に至る。

(4) 清武から宮崎へ

中野は明治の初め132戸あり鉄肥藩時代には地頭所、明治に入つてからは戸長役場が置かれた。鉄肥を立った参勤交代の一一行の最初の宿泊地でもある。中野から下加納まではドリカの道で舗装されているが、現在は間道的役割しか果たしていないため街道沿いは割合往時の面影をとどめている。又、中野ん坂とも花立坂とも言われていたこの坂は六部衆が鉢をチンチソならして通ったからであろうか、チンチソ坂とも言った。松並木が児童であったと言われるこの坂は南加納で、都城から中野を経由して宮崎に出る県道（旧鹿児島街道）と合する。

これより約500m先の山際にオンソジの井泉^{オニソジ}がある。（オンソジは御嶽の転訛か）四方切石囲いの井泉は今なお清水をたたえている。土地の者はこの水でお茶を立て参勤交代で細島に向う藩主に献じたと言う。

この井泉より約100m先に加納神社（八幡神社）がある。清武地頭は藩主をここまで送り道中の無事を祈願した。両国橋は加納神社より約50m先で、昔は板橋が架かっていた。この橋が清武（鉄肥藩）と宮崎（延岡藩）との境であるため両国橋と言ったのであろうか、現在は永久橋で地名をとり源藤橋と言う。

両国橋を北東に進むと三角茶屋である。三角茶屋は今でこそ近代的な店構えになっているが、10年前は昔の茶店そのままのうどん屋であった。ここは宮崎・清武・古城・生

目・赤江に向う各道の交点で昔も今も交通の要所である。三角茶屋を過ぎると中村町である。中村町は古城の今鶴福寺の門前町とも言われ、明治時代以前は宮崎で最も賑わった所で、今でも通りに面した店舗の裏手には白壁造りの民家や土蔵がある。中村通りを北進すると大淀川の渡しである。渡しの近くには、2軒の廻船問屋があり、8艘の大艤船が川を往復した。木橋が架けられたのは明治に入つてからである。対岸は上野町であるが、現在は家具店通りとなっており古い構えの家は1～2軒に過ぎない。

（又、中野から加納までは、別に、中野から現在の国道260号線を横切って西に向い、清武城跡の下を通って加納に出る山道がある。）

(5) 宮崎から佐土原へ

宮崎から佐土原までは、往時、佐土原往還・宮崎往還と呼ばれていた。現在の国道10号線（宮崎一新名爪）と国道210号線と重なる。

上野町通りを北に進み右折すると宮崎市のメインストリート橘通りである。これより江平町通りまで市街化されているため旧街道の面影は全くない。ただ街道沿いを少々引込んだ所には神社・寺・祠堂等が残る。瀬戸水神⁶⁰・小戸神社・網掛観音・宮崎神宮等がそうである。

江平町を北進すると花ヶ島である。昔はこのあたりまで入江だったようで、漁師達が信仰したと言う水徳神が祀られている。花ヶ島の次は蓮ヶ池であり、その名の如くおり街道右手に大きな池があり、池をとりまく丘陵斜面に無数の横穴古墳がある。

新名爪の森平には佐土原に向う道と高鍋に向う道の分岐点で、道路横の切り通しの崖上に天正四年銘の六地蔵⁶¹が立つ。次の轍は、もと府下であり明治の初め50戸の大集落で、

その次は35戸の集落中島である。街道はこれら山際に沿う集落の左側の水田部分を通る。
中島も中島も旧庄原村に属した。

中島を過ぎると石崎川に架かる浮橋である。ここは父通の要所であったため水面に浮かべる板橋とし、一旦事ある際には解き放ち交通を遮断した。現在の有吉橋の4m程下流地点である。浮橋から1km程で一里松である。昔は道標として一本松がそびえ殿様はここで休息した。高山彦九郎も当所で休息をとり、久峯観音に詣でたことを日記に記している。

一里松から約1.5kmで岩見堂である。岩見堂の近くには、源頼朝ゆかりの神社や寺が多く鎌倉五郎景政が祀る五郎神社・頼朝の創立とする平等寺跡・頼朝の墓と伝えられる五輪塔がある。岩見堂をまっすぐ進むと下村川にかかる。かつては足取川と言い板橋が架かった。現在明治41年に築造された眼鏡橋が架かる。ここから野久尾・愛宕神社前を通り佐土原城下に入る道は、現在の道路とは重複せず林道として利用されているために、旧街道の跡を今にとめている。

野久尾の一里坂は、藩政時代には、佐土原藩は仇敵の既肥・伊東藩の勤労交代の一行為が通る時、槍をさすを作り有事に備えた。一里坂を登りつめると旧茶屋村である。藤谷尊府の命により配流された日講上人がこの地で過したが、今は一軒の民家もなく道の両側に塙敷跡のみ残る。ここを下ると愛宕神社の社務所前に出る。愛宕神社は佐土原藩主祈願七社の一つである。これより池の下を通り、畑を抜けて進むと佐土原小学校の東側に出る。南北に溝が走り草がおい茂っているが外堀の跡と言われ、ここに大手門があった。既肥大手門から1.6里1.4町の道のりである。

4 街道沿いの文化財

既肥 <口南市>

① 既肥城跡 ⑨

伊東氏5万石の居城で大手門の城壁は昔のままの姿を残している。ここは又、江戸時代の治所既肥院の跡もある。

長禄2年(1458)既肥津氏がこの城を治めてから、伊東氏との抗争が88年の長きにわたって繰り返されたと云われている。

永禄11年(1568)に至って伊東氏の治める所となった。

② 既肥城歴史資料館 ⑨

大手門には入り、西側の石段を登ると本丸跡に達する。資料館は昭和15年日に南市が既肥城復元事業の一環として建設した。

建物は入母屋造瓦葺で唐破風の門をつけた立派なものである。面積は262.84m²(約80坪)で展示資料は約150点を有する。資料は既肥藩主伊東家の伝わる武具・書画・生活調度品・古文書等が主である。

③ 既肥城大手門石橋

復原なった既肥城大手門を出ると外濠に構築された石橋がある。日向地誌によれば、最初は板橋のよう、「既肥城南の隣に架す長さ三間余 櫛千あり」とある。

④ 伊東邸(予章館)

既肥城大手門入口左手にある予章館と称する建物は、清楚古雅な造りの武家屋敷で、庭園は岩石の配置にその妙をつくした名園で既肥三名園の一つである。

藩主の一族伊東正木の邸であったが、明治2年結婚公が既肥藩知事に任せられるに及んで、既肥城よりここに移られた。

⑤ 侍屋敷 ⑨

既肥城は、西に酒谷川の懸崖を臨み、東南

に城郭を囲むが如く侍屋敷が碁盤目状に規則正しく立ち並んでいる。

道の左右に続く石垣や古い門構えに静かなたたずまいを残す武家屋敷通りは、昭和62年国の重要伝統的建造物群保存地区に選定された。

⑥ 振徳堂

飫肥藩振徳堂は大手門前から東へ行く横馬場通りにある。

亨和元年11月(1801)伊東祐民が学問所として開いたのが始まりで、天保元年に(1830)学舎を改築し、振徳堂と命名し、安井治洲・忌軒親子を教授として迎えた。

維新後飫肥隊が西南の役に於て兵站隊として銃弾の製造を行った事もある。

⑦ 板敷神社

振徳堂より更に進むと十文字に出る。左折して坂を登ると神社があり、田ノ上八幡とも言っている。

昔、人間国桑原郡の稻穂弥五郎が、一宮正八幡の神体を負うてここに祀ったという言い伝えがある。

天永元年(1110)10月の創建とされ、祭日には一丈五尺もある弥五郎の人形を車に乗せ、子供に引かせて町々を巡る。

なお、神社入口に初代藩主伊東祐兵が移し替えたという大クスがある。

⑧ 権法律弘全の供養碑

板敷神社境内にあり、宝暦8年(1756)に建立された供養碑で「世波にこの尾の枝折れや雪の山」の句が刻まれている。

弘全は金剛院の住職で、連歌・俳句に長じていた。供養碑は俗に「そそけの神」とも言われている。

⑨ 八幡馬場の石道跡

板敷神社の西、飫肥中学校の裏手に在る。

日向地誌によると、「隣底より石を壁て之を築く、長さ十五間、高さ三間、幅二間、石橋道であれば間諱の潜伏の患なし」と記されている。

又、ここより直経2mの地下道が約100m東に突き抜けていたようだが、今はこの石道も草木におおわれている。

⑩ 小村寿太郎誕生碑

大手門から南に武家屋敷の町並みを辿ると、本町通りに出る。その角左側に、明治外交の立役者小村寿太郎侯の誕生碑が建っている。侯は安政2年(1855)この地本町で生まれ、代々家は18石を禄していた。

日露戦争の講和条約は侯の勇気と英断によるものとして有名である。

碑文は東郷元師の書、杉浦重剛の運詩が刻まれている。

⑪ 飫肥の商人町 ⑫

東西に200m程続く本町通りの街並みは、商人町で、軒低く立ち並びしきいの白壁やすすぐた格子戸に昔の面影をとどめている。

⑫ 赤面法印の墓

本町通りに平行して東流する酒谷川の対岸山手に、新山櫻荷神社がある。岩崎稻荷とも言ひ本町通りの最東端稻荷下橋を渡ると近い。この神社の西南に法印の墓がある。

赤面法印は祐通和尚の別名で、美男と言われた己の顔を修徳の仇なりと熱湯をかけ、大火傷の赤面とした。苦行の歴を積んだ英僧で墓石に、「当中山廻山祐通 寛永四卯八月」とある。

⑬ 安福寺跡

稻荷下橋を渡らずに左折し北に進むと今町通りに出る。この通りはもと唐人街と言われ神社仏閣の多い町筋である。

安福寺跡はこの通りの西側にあって、足利

尊氏が一国一刹頼寺を建てた時建てられた山
筋ある寺である。

日向地誌によると、文明16年(1484)伊東祐色が祇肥出兵の折、郷之原の安國寺に陣すとあり、長享元年(1487)に郷之原よりこの地に移され祇肥5ヶ寺の1つに列した。

⑩ 嵩南大和尚の墓

安國寺跡の南東、山川人龍寺跡にあり、「丈余の卵塔に黄桜が枝幹を以て抱き、さきやかな奇觀を呈する」との記録がある。

和尚は祇肥の人で江戸時代の初期江戸の東庵寺の開基となり一代の高僧と言われ、寛永21年6月(1644)大天鑑禪師の勅号を賜った。東京赤坂の雲南坂はこの禪師の名から来ていると言われている。

⑪ 中ノ尾供養碑 (国指定)

街道の西側に飛ヶ峯の麓から1.4km登った所に中ノ尾供養碑がある。頂上は要害の地で岩が染かれて、島津氏と伊東氏がこの砦をめぐって攻防を繰り返した。

天文18年4月(1549)伊東軍が改めて300余人が戦死した。後、島津方が供養碑を建てた、敵方供養碑で高さ1.5m正面に地蔵の像が彫ってある。

北郷町 <南那珂郡>

⑫ 水無観音

今町通りを過ぎ太田橋より左の旧道に入る。かつては松並木が見事であったと言う山路を抜けると、内之田の平地に出るがその出口に観音堂があり、別名子持観音と言っていた。当時この供に牛を受けることが出来なかつた水子達の靈を弔う観音像が今も祀られている。

明治の始め頃までは、境内は広く堂宇は近畿で眺望もきき街道の一の電場と言われていた。

⑬ 内之田の処刑場跡

水無観音堂から旧道を下ると現在の道と落ち合う。そこより北東の田の中に石造りの地蔵尊がある。首切り地蔵とも言われ、祇肥藩主が処刑者の靈を弔うため彫らせたものと言われている。

ここには処刑場があって周囲は竹や籐木が繁り遠くから望見できたと言う。

罪人の斬殺後、首を井戸で洗ったと言われていて水田の畔に首先井戸の組石が三個残っている。

⑭ 大王講

内之田の部落に入ると西の小高い山の上に小さな祠がある。現在も講は存続し毎年1回10月から11月にかけて祭が行われている。伝承によるとその起源は寛永の始め(1627)少人数の武士達によって結成されたもので女人禁制であった。講は庶民のもので下級武士により行われた事は注目すべきである。

⑮ 内之田の一里塚 (④)

内之田部落を通り抜けると街道の右側に觀音寺西寺がある。一里塚はこの境内に立っているが、元は近くの処刑場のわかれ道に立っていたようである。

祇肥城から内之田まで一里、この一里塚には一本松がそびえ一里塚と言われていた。今は水田で松もない。

⑯ 大藤の板碑

内之田集落より北に700m進むと旧街道は右に折れ広瀬川に架かる大藤橋を渡って上大藤の集落に入る。

ここより南東500m進むと、下大藤の折生田墓地に3つに折れた板碑がある。応永6年(1393)の建立で鎌倉時代の板碑である。

又、上大藤に鎮座する大藤神社のあたりに待詰所があった。

② 立野番所跡

旧飫肥街道は大藤の集落から広渡川東岸沿いに約1.5km北に進み川を渡ると（山住橋下流約300m）県道に出合う。ここに立野番所が所在したが、富士原越の間道が飫肥街道と合流する地点でもある。

番所には足軽から選ばれた番士が勤め、往来の人々を検問した。番所は俗称で正式には諸口番と呼び交通の要所に置かれた。

番所跡は現在民家が建っている。

③ 鄭之原神社

鄭之原の町はずれから旧街道は右に折れて花立に至るが、そのわかれ路より80m先の左脇に鎮座している。

鄭之原神社は、活津彦根命と大山祇神を合祀する神社で以前は一ノ瀬川の上屋敷にあり、山宮大明神と言われた。

明治5年村内13座の村社を遷座してここに合祀し今の名に改められた。

④ 花立のお篠籠立て場 ⑤

鄭之原神社から道を下って一ノ瀬板橋（上郷橋）を渡ると、旧飫肥街道でもっとも難所と言われた花立山の登り口に至る。稜線沿いの桜の並木の急坂をやや直線的に登っていたようである。

頂上にお篠籠立て場があって、参勤交代で江戸に上る一行はここではるか底肥の山並みに別れを告げた。

⑥ 元仮屋の板碑

花立峠を越えて北に約4km山腹にわずかに残る旧道が元仮屋から本太郎に通ずる開拓道路と交っている。

路傍に串木寺権大僧都幸有と刻された板碑が立つ。なお、そこを至る石段横に高さ90cmの石燈籠が立つが、文化14年平野村奉寄進の刻銘がある。

村人の話によると、何者かに殺された山伏の墓と言う。

⑦ 元仮屋の桜並木路 ⑧

本太郎の開拓道路と林道はここで旧街道の一部を利用しているが、そこに老桜の並木が約300mの間続いている、嚴様街道の面影をとどめている。

街道に残る並木としては、珍らしいもので、桜と桜の間はシイ・カシ類の雜木がおい茂っている。

⑨ 関所の石仏

桜の並木路を過ぎると道の痕跡は残しているが、通行は容易でない。ここから関所までは約1.5kmである。

関所の手前に自然石に浮彫り状に刻まれた石仏が、訪ねる人とてないこの街道横に佇んでいる。中ほどにひび割れが生じた上、頭部が欠けていて哀れさをきそう。

安永6丁酉六月二十四日、旅行者、宮崎古城□□の刻銘がある。

⑩ 山仮屋の関所跡

藩政時代山仮屋は飫肥と清武を結ぶ要所で関所として好適の場所であった。この街道は慶長の頃（1578—1614）に開きくされたと言われている。

飫肥藩になってから館舎を建てて関所を設け13戸の番卒（足軽格）を置いて往来の人馬を監視した。参勤交代の時休息所にもなったが、現在全長160mの間に石垣積みの屋敷跡が残っている。

⑪ イチイガシの巨木と水汲み場 ⑫

関所からの下り坂を10m程行くと抱もあるろうかと思われるイチイガシの大木が空間を見せて立っている。

ここから少し下手に石蓋があったと言う水汲み場がある。この山頂に湧き出る水は番卒

の水汲み場であり関所を通り抜ける旅人ののどをうるおす水でもあった。

② 郷之原城跡（②から続く）

一方今言う飫肥街道は、郷之原神社から左手山際の道を北西に進む。途中右手に郷之原城跡を見下すことができる。

郷之原城は南北朝時代の城であって、西北に石崎山を負い東北に一ノ瀬川を控へ飫肥城の左翼をなす要害地であった。創築年月はさだかでないが、正平17年(1326)の合戦から貞治4年(1365)の陥落までのことを記した記録がある。現在、中学校が建っている。

③ 郷之原の道標

飫肥街道は郷之原城跡裏側の山道を行く。坂を登り詰めた所に北郷小学校を真下に望む絶景の地がある。その道筋に半ば横倒しになつた転落寸前の道標がある。

距 留 宮崎元標 柏原里 郷之原村

宿野へ 柏町五拾七間

郷之原へ 柏原町

明治37年6月の建立である。

④ 潮嶽神社

坂元の集落から1.3kmの宿野の集落に入る。と、左側に南那珂地方の信仰を集めた潮嶽神社がある。海幸・山幸のうち海幸(火闘降命)を祭神としており、古米縫針(釣針に関連)の貸借を禁じていたらしい。又、初胎の産児の額に紅を以て犬の字を書くが、これは火闘降命の宮廷奉仕の古俗によるものであろうと言われている。この風習は今は無い。

又、当神社には不動明王像・地藏像が安置されている。

⑤ 宿野の五輪塔と六地蔵

潮嶽神社より南約100mの宿野の墓地内にある。五輪塔は空輪が亡失しているが、形は

大きく立派である。六地蔵は天文九庚子八月(1540)紀年銘及び福徳円満無病息災の願文が陰刻されている。

⑥ 王塚古墳

潮嶽神社より飫肥街道を西へ約1km、谷合のわかれ路より小河内川を隔てた所にある自然の山崖を利用した古式古墳である。潮嶽神社の御祭神の陵と言い伝えられている。

⑦ 朝倉茶屋（⑦から続く）

谷合のわかれ道から右に折れる飫肥街道は、曲りくねった山道である。8.5km程行くと山坂屋の集落に入る。1.0戸足らずで、朝倉茶屋は中ほどにある。

以前は、これより山手の旧街道筋にあって参勤交代の一行が休息したと言われているがさだかでない。猪の料理と旅の疲れをいやす湯場は旅人に喜ばれた。今は廃屋となりその面影はない。

⑧ 山坂屋トンネル

朝倉茶屋より1.8km程進むと、宮崎県で最初に築造された山坂屋トンネルに着く。明治25年の築造で、長さ31間、高さ幅共に2.2mの煉瓦造りのトンネルで宮崎までの距離は6里2.6町と記されている。

トンネルを出ると右側にちょっとした広場がある。ここが咲の茶屋跡で猪が一匹軒下にぶら下げられて、旅人は名物猪料理に舌鼓を打ったと言う。

旧街道はこのトンネルの上を通りている。

宮崎市

⑨ 汗道（⑨）

家一郷の谷から上る道は岩場を切り開き石垣を築いた道が多い。馬車道として整備されたのは明治27年頃である。それまでは馬が通れる程度の道幅で崖道が多く旧道もよく利

用されていたと言う。

この道際には「汗道」の石碑があるのはもっともと思われる。

⑩ 柏崎の馬頭観音

家一郷谷から2.2kmほど登ると柏崎に至る。

汗道の石碑あたりから鏡洲峠までは、現在宮崎市である。

上り坂は馬車百貫と言われる難所で蛇には憩の茶屋があった。馬に耐え薬をやり一息入れる所、今は疲労によってたおれた馬の死を悼む馬頭観音が杉山にひっそりと立つだけである。

⑪ 九平の地蔵菩薩

坂を下ると九平の集落である。日向地誌に「双石嶺の北麓にあり人家三十四戸」とある。

旧街道筋には、土手を囲らした屋敷跡があつて延享元年(1744)の墓石一基が取り残されている。

現在民家は街道沿いに8戸程度散在しているにすぎず、地蔵のみが多く目立つ。

⑫ 九平の道標

九平集落を過ぎて約1km進むと右側に清流の落ちる小谷がある。住民は「ウ谷」と言っているが、水汲み場であり、休息の場でもあった。

道標は水汲み場の脇に立っている。

距 離 宮崎元標四里 木花村大字加江田

清武へ 老甲参拾四町四拾六間

宿野へ 六里参町九間

明治37年9月

⑬ 双石山

九平集落を過ぎるあたりから旧飫肥街道は下り坂となり飫肥街道とほぼ平行しながら北に向っている。

双石山の山嶺が急にせまり、道は右に左に曲りくねっている。

双石山は標高509mであり、随所に奇岩や絶壁が見られ、山をおおう自然林は国指定の天然記念物となっている。

清武町 <宮崎郡>

⑭ 勢田峠 ⑮

旧街道は塙鶴から鏡洲川の東を山裾沿いに進み、竹の内の集落手前から左に折れる。昼間も薄暗い坂道は1m幅に踏み固められた昔のままの道であり、登りつめると勢田峠である。

日向地誌に、「飫肥街道に属す、本村(清武)の南畔にあり上る二町許の坂なれど、峠路至駿駅僅に通す峠を経て又下に出れば、鏡洲村に入る」とある。

⑯ 勢田寺跡

勢田峠を下ると間もなく右に長明寺跡、左に勢田寺跡を見る。勢田寺は真言宗飫肥願成就寺の末派で、日向七堂伽藍の一つに数えられた。開山は日經上人、本尊は千手觀世音菩薩である。

黒坂にある五輪塔はここから移したものである。現在、寺跡はみかん園と杉山になっている。

⑰ 大堤の池塘修築碑(⑯から続く)

今言う飫肥街道は、九平の集落から鏡洲峠に向い大堤に出るが、この間約4kmである。9つの池からなり、池塘修築の碑が建っている。

碑文によると、天保14年癸卯(1843)の築堤で約18町歩の水田がうるおったことがわかる。

⑱ 黒坂の五輪塔(県指定)

坂の下の池から黒坂の集落に入ると街道右側に觀音堂があって、その脇に地輪と水輪からなる弘安8年(1285)製作の鎌倉期の五

輪塔がある。この五輪塔は明治の初め、勢田寺から移されたものと言われている。

なお、寺域内に内之田の一里塚標と同一のものが存在するが旧街道から移したものであろう。

④ 上使橋渡し ⑤ (②から続く)

勢田岬を越す旧飫肥街道と鏡洲岬を越す飫肥街道は永田の集落で合流し清武川に至っている。渡しは、現在の水久橋の上流300mの所にあった。

日向地誌によれば、「飫肥街道に属し、幅四十五間、平水深二、三尺、水漲れば船渡、冬月は單板橋を架す。但し幕政の巡査役至るあれば特に一板橋を架す」とあり、上使橋の橋名はここからきている。

⑥ 新町の町並み ⑤

上使橋を渡ると新町通りに入る。昔は八軒町又は寺町と言い、新町と言うようになったのは安政年間と言われる。

歩徒武士や旅人が山越えの長い旅を忘れて、左右の軒店で休息したり、買物をしたりする景が今に浮かぶ程この通りは古さを残している。

ここからは、飫肥本町駅へ8里23町宮崎へ1里29町、佐土原へ6里23町である。

⑦ 中野神社

新町から曲りくねった急坂の八幡坂を登りつめると中野である。以前は道に横木をはじめ込む程急な坂道で、途中右側の石段を登った所に中野神社は鎮座した。

中野神社は中野八幡宮とも称し、彦神天皇・神功皇后・玉依姫命及び飫肥藩主伊東祐堯の靈を合祀してある。

⑧ 中野の地頭所跡

八幡坂を登りつめると中野の台地で、地頭所はその中心部にあった。天正15年(1587)

の設置で管轄は18ヶ村に及び、地頭には石高150石位の士が任せられたが、飫肥藩北部の抑えとして地頭の職責は重かった。

後、地頭所は郡治所、更に戸長役場へと移り変わった。今は農地になっている。

⑨ 伊東氏累世墓

中野神社の東に隣接する文永寺跡にある。伊東祐氏より伊東祐玄に至る12世の歴代藩主の墓碑で、板碑形式の立派な墓である。清武郷の住民が参拝のために飫肥から分骨祭祀したもので、伊東義祐の老臣川崎駿河守清武地頭の墓もここにある。

⑩ 安井息軒旧宅 ⑤(国指定)

中野の東方半九公園内に在る。息軒は寛政11年1月1日(1799)生れ、江戸昌平坂学問所に学んだ後、父渝洲と共に明教堂で子弟の教育に当り更に飫肥藩校、振徳堂で教鞭をとった。落合双石・平部崎南・阿萬豊蔵等数多くの学者を輩出し世に送っている。

今は音を忍ぶが間のほととぎす

いつか雲井のよそに名乗らむ

息軒自作の和歌を刻んだ石碑が旧宅内に立つ

⑪ 平部崎南生家 ⑤

日向地誌の著者崎南は、安井息軒生家の近くの和田家に文化2年(1805)に生れ成人してから飫肥城下の平部家をついだ。安井息軒に師事し、振徳堂教授となり家老として藩政に寄与した。著書には日向地誌の他、日向私史・日向纂記・日向古跡誌等があり、明治初年の日向に大きな文化的貢献をした。特に日向地誌は10年の歳月を費やし、日向史研究上の貴重な原典又は文献資料となっている。

⑫ 中野の馬術訓練所跡

街道より約500m東方の台地にある。

江藩時代に於ける武七達の馬術訓練所であ

って、広さは約3町歩（3ヘクタール）周囲には高さ5尺位の土手をもって囲らしてあった。土手は最近まであったが耕地整理で取り除かれ一部が残っている。

◎ 清武古墳（県指定）

中野の坂（花立坂）を下り平野の橋を渡ると上加納に入る。街道左手加納の丘陵地に古墳4基が存在していて、1基は前方後円墳で、他は円墳である。何れも規模は小さい。

◎ オンソジの井泉（⑤）

中野の坂を下り終えると八重川に架かる牧の札橋に至る。県道20号線（旧薩摩街道）と合流して約500m位進むと、左側山際に井泉がある。四方を切り石で囲んだ上、底部が石で仕切ってある。参勤交代の時、藩主にお茶を献上するための水と、住民が用いる水を区分したものである。

横を流れる小川を味垂川と言い、この井泉を「オンソジ」といっている。オンソジは、オミソギ御殿の意味ではなかろうか。

現在、当初の大きさの半分となっている。

◎ 加納神社（⑥）

オンソジの井泉から北約100m、加納の集落の中ほどにあり、福野八幡とも称し、祭神は大日豐貴尊外3神である。清武地頭は、参勤交代で上り下りする藩主の奉送迎をここまで行い、お茶を献上し、長途の無事を祈願したと言う。

境内に正徳4年（1714）の石碑がある。

宮崎市

◎ 鮫藤板橋

加納神社から約50m、清武町と宮崎市の境界を過ぎると間もなく鯛藤川に至る。ここには「長さ十一間、幅一間四尺、欄干あり」と記録にある鯛藤板橋が架かっていた。藩境

であったため飫肥と延岡両藩が架けたため、両国橋又は、寄合橋と言っていた。飫肥街道の重要な部分を占めている。この境界に「すぎ茶屋」があったとあるがその場所は不明である。

◎ 鮫井城跡

源藤板橋を渡ると延岡藩領官崎に入る。横町の中程に一本松があつて左の方に首切り場があった。ここから西方約600mの丘陵に、鮫井城跡が見える。伊東48城の一つで、大授5年（1879）創築以来、伊東・島津の争奪がくり返され、天正15年（1587）伊東の治める所となった。

城下に近い横町は非常ににぎわい、「動馬き寄さすか、鮫井さすか、横町どろどろ押かけた」こんな風に上地の者は唄っていた。

◎ 大淀川の船渡し

横町より三角茶屋を抜け中村町に出ると大淀川に至る。大淀川は徳川の初期頃までは赤井川と称していた。中村町から対岸の上野町への渡しは人愛にぎわったと言う。今の江南荘あたりが船着場で、日向地誌によると、「回船問屋二軒、大渡船八艘」とあるのはこのあたりであろうか。

明治6年に木橋が架けられ賃取り橋と言われた記録が残っているが、当時の船賃は新貨で1人5厘、馬一足1錢5厘であった。

◎ 岩瀬水神

対岸の渡し場から東約1kmの所に岩瀬水神社がある。社殿の横に高さ80cmの石碑があつて、「奉請岩瀬水神宮、安政六年九月建立」とある。

古記録にある「小戸の渡し」とはこの神社あたりであろうと言われている。岩瀬水神は古くより船上に乘る人々に崇敬されていた。伊東義祐の飫肥紀行にもこの地の事が記されて

いる。

⑩ 小戸神社

上野町より西の方大淀川沿い約1.5kmの所に在る。祭神はイザナギ・イザナミの尊で古くは大淀河口に当る下別府に在ったが、寛文3年(1663)の震災で住民と共に上野町に移った。

文明5年(1473)以来伊東家代々の崇敬を受け、橘郷のうち田30町を神領として寄進された。祭典は極めて花轍で名人による参詣記が残されている。

⑪ 網掛觀音

江平町を出る当りから東に1kmばかりの所に宝寿山正光寺がある。この寺は景清の創建と言う。

この寺の山門を造る時のこと、東南の海中に光るものを見たので、舟を出し網を打ったところ網で刻んだ觀音像が引きあげられた。それで本尊の十一面觀音菩薩は網掛觀音と言う。

他に永禄年間の宝塔や六地藏輪等がある。

⑫ 宮崎神宮

上野町から花ヶ島町に通ずる街道筋には多くの寺社があって、創建を延喜2年とする上行寺を始め10社は下らない。

宮崎神宮は街道より西約500mの所にある。神武天皇を主祭神として祀る神社で延喜8年(1197)の創建と言われる。

宮崎神宮がとり行う流鏑馬や藤祭り、京都の時代祭りに匹敵する神武さんは広く県民に親しまれている。

⑬ 宮崎県総合博物館 ⑭

宮崎神宮神苑内の北西隅に明治10年記念事業として県が建設した。

旧県立博物館は、考古、歴史部門を主とし、新たに自然科学部門と美術部門を加え

総合博物館としてスタートした。

考古歴史部門は時代ごとに展示がなされ、民俗部門は年中行事に合わせたテーマ展を行っている。なお、博物館東側敷地には、県内の代表的民家4棟が移築復原されている。

⑮ 花ヶ島の水徳神

花ヶ島の西田川に花ヶ島橋がある。その橋のたもとの左側に、水徳神宮と言われる水神様が祀られている。

昔はこの当りまで入江であって豊漁を祈る祭りがとり行われたが、今は作物の豊作を祝う踊りと相撲が奉納されている。

⑯ 蓼ヶ池横穴群(國指定)

花ヶ島を北に進むと蓼ヶ池に至るが、池を取りまく丘陵地に6～7世紀の造営とされる6～7基の横穴がある。

高塚古墳のような権力者の墓から家族墓としての性格を持つようになったこれらの横穴群は国指定の史跡になっている。

⑰ 新名爪の六地藏輪 ⑯

高鍋に向う街道(国道10号線)と佐土原に向う街道との分岐点に近い切り通しの崖上に、六地藏輪がある。

以前は道際にあったのを道路拡張工事の際に場所に移したと言う。奉 大乘妙典一千部、母 作、清光泰久とあり、天正4年(1576)丙子10月に建てられた。

⑱ 佐吉古墳(県指定)

江平からの佐土原往還を新名爪で縦ぎ、広原を経て佐土原に至る道を宮崎往還とも言つた。

佐吉古墳は前方後円墳だが、街道から東へ約800mの佐吉中学校裏手にあり、杉山になっている後円部頂上には白山神社が祀られている。

⑲ 広原の六地藏輪

麓を過ぎ中島に入る手前の四辻の北西約700mの地点、家並が切れたあたり、田の片すみに立っている。

大永3年(1523)秀慶六法師の刻銘があるこの六地蔵幢は、近所の人が祀っているが、前掛地蔵と言っている。

㊱ 極楽寺の仏像

広原の六地蔵幢を更に西へ700m程入ると極楽寺公民館があって、仏像と梵鐘はそこに保管されている。

新迦如来坐像・十一面觀世音菩薩坐像は何れも木造りで鎌舟末期の作と言われている。又、梵鐘は天保3年の銘があり、公民館の軒につるされて今も使用されている。

㊲ 浸々橋(浮橋)

佐土原町と宮崎市の境となっている石崎川に架かっている。

戦国時代この地は要害の地であったため、橋をわざと水面に浮かべ両岸の木につなぎ、有事の時には解き放って交通を遮断した。それで、ビタビタ橋と言ったが今は有喜橋と言っている。

浸々橋は現在の橋より4m位下流に架けられ長さ12尺、幅5尺、高水面2丈6尺の板橋であったと記されている。

佐土原町 <宮崎郡>

㊳ 塔頭師の六地蔵幢

浮橋から一里松まで約1km、一里松は一本松のあった所で駕籠の休まれた場所である。そこより東へ下那珂に至る途中に塔頭師がある。石段を80余り登ると本堂があり、右すみに六地蔵幢が立っている。

七世息所同 菩提、天正九年辛巳七月、の記銘がある。

㊴ 五郎神社

一里松から北に1.6km程進むと、岩見堂の集落に入る。

五郎神社は集落の東約300mの丘の上にあり、頼朝麾下の勇士鎌倉権五郎景政を祀り、鶴岡八幡の扁額を戴している。

㊵ 夜泣橋

岩見堂の集落から更に行くと下村川に架かる夜泣橋に至る。

日向地誌によれば、「一名榎本橋と言い宮崎往還足取川に架す、土橋なり、長さ八間幅七尺」とある。

昔、キク女という女が子供を抱いてこの川に投身した。夜になると橋のたもとから子供の泣き声がするので、いつとはなしに夜泣橋と言われるようになったとは、近くの古老人の話である。

㊥ 平等寺の祠堂

夜泣橋を更に進むと三叉路に出る。これより約1.8km西の台地に平等寺跡があり、源賴朝の創立と伝えられている。

中尊の千手觀音と脇侍の毘沙門天、不動明王を祀る。これらの諸像は足利時代の作と言われている。当時には梵鐘があつて早懸の折、鐘音渾に沈めて雨氣をしたと言う。

㊥ 平等寺觀音堂の五輪塔

平等寺の南約100mの所に公民館があり、その横に觀音堂がある。その脇の小高い丘に五輪塔があつて源賴朝の墓と伝承されている。又、その外に永和4年(1388)の供養碑、青面金剛碑、天正2年の墓石群がある。

㊥ 足取川板橋 ㊥

三叉路から約1km行くと曲流する足取川(下村川)に再び至る。ここに架せられた橋は、日向地誌によると、「宮崎往還足取川に架し、長さ七間余、幅二尺五寸」とあるが、今は「下村橋」と言っている。その横に明治41年

築造の眼鏡橋が残っており、足取川板橋は更にその東側に架かっていた。

⑦ 野久尾の一里坂

下村橋から約500m進むと東野久尾のわかれ道に至る。左は新しい佐上原バイパスで右は旧県道である。この道を約150m行くと右に旧街道の山道に入る。坂道を登ると旧茶屋村に入る。

佐土原ではこの坂道を一里坂と称し、参勤交代の時佐土原城下を通る飫肥藩の一行に対して、積みすまをつくって有事に備えたという。飫肥藩との対立は慶長16年(1611)まで続いた。

⑧ 茶屋村跡 ⑨

一里坂を越えると、今は杉山となっている高台に出る。屋敷跡が多数見られかってはこの旧街道をはさんで家が建っていた事がわかる。

現在、民家は一軒もなく朽ち果てた稻荷神社と石段に茶屋村の名残りを見る。又、路脇に、奉持月天子及び享和元年茶屋村14人衆の名前を刻した石碑がある。

⑩ 僧日講遺跡(県指定)

僧日講の墓は旧街道西側今坂畠地の東丘に在る。元は旧街道筋、旧茶屋村にあった。

日講上人は不受不施を説き、日蓮宗から分立したが寛文6年(1686)幕府に抗議したため佐土原に配流された。

78才で歿するまで「録内啓豪」他数多くの書を著し同藩の学問の推進役を果した。

⑪ 愛宕神社

旧茶屋村の坂を下り途中から左折して谷間道に入り、そのまま行くと愛宕神社の社務所に出る。

愛宕神社の社殿は石段を200段登った所にある。祭神は加具土の大神で創建は養老2年

(718)と言われ、佐土原藩主折頸七社の一つとして崇められた。

⑫ 佐土原口の旧道

東野久尾から旧茶屋村を抜ける旧街道は一部を除いてそのまま林道として使用されているため、保存状態はよく旧街道の面影を残している。

この道は、昔、佐土原城下へ至る唯一の街道であり、又、佐土原城南の要所と言われた所である。

⑬ 佐土原城大手門跡 ⑭

愛宕神社の鳥居横の池の下を通り畠を抜けると佐土原小学校東側に出る。ここは、佐土原城大手門の跡で、南北に流れている溝が外堀であると言われている。今は雑草がおい茂り汚水が流れているに過ぎない。

飫肥城大手門をくぐってから16里14町という長い道程を経て佐土原城大手門に至っているのである。



① 既肥城跡
城壁が昔のままの姿を残す大手門



② 既肥城歴史資料館



③ 侍屋敷
国の重要伝統的建造物群保存地区に選定された武家屋敷通り。



④ 既肥の商人町
東西に 300 m 程続く本町通り。



⑤ 内之田の一里塚



◎花立のお駕籠立て場
参勤交代の一行が、ひと休みした。



◎元飯屋の坂並木路
殿様街道の面影を残す並
木路。



◎水汲み場
関所を通り抜ける旅人
ののどをうるおした。



◎朝倉茶屋
猪料理が名物だったが、
今は施屋である。



◎汗道
道際に「汗道」の石碑がある石垣を築
いた道。



⑭ 勢田峠
昼間も薄暗い峠の坂道



⑮ 上使橋渡し
現在の永久橋の上流300mの所に渡しがあった。



⑯ 新町の町並み
徒步武士や旅人が休息したり買物をしたりした。



⑰ 安井息軒旧宅
国指定史跡となっている旧宅には、息軒自作の和歌を刻んだ石碑が立つ。



⑲ 平部崎南生家
「日向地誌」の著者を生んだ和田家



⑤ オンソジの井泉
参勤交代の時、藩主にこの井泉の水
でお茶を献上した。



⑥ 加納神社
参勤交代の長途の無事
を祈願した。



⑦ 宮崎県総合博物館



⑧ 新名爪の六地蔵幢
奉済大乗好典一千部
母為作 清光泰久 とある。



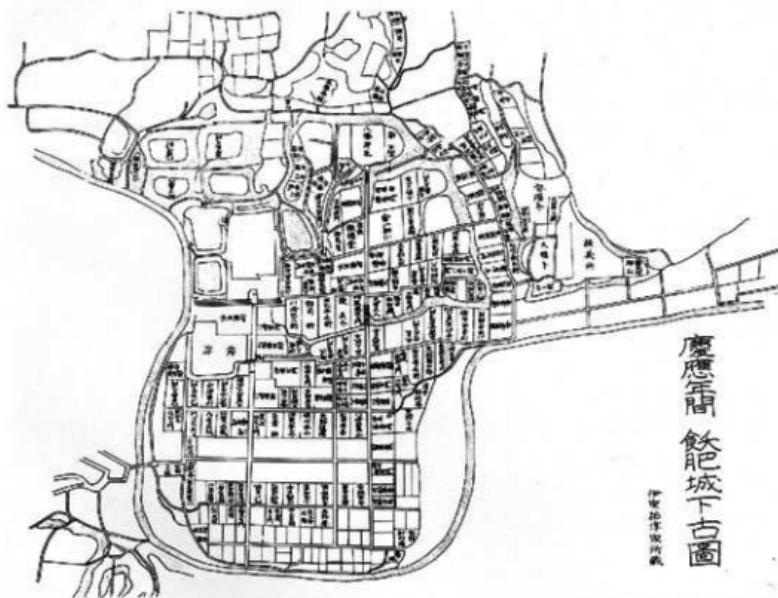
⑨ 足取川板橋
現在の下村橋の東側に足取川板橋はあ
った。



⑦ 茶屋村跡
現在民家は一軒もないが、
石段に茶屋村の名残りがある。



⑧ 佐土原城大手門跡
南北に流れる溝が外堀
である。今は雑草が茂っている。



○監修 石川恒太郎 県文化財保護審議会委員

○調査員

街道名	氏名	役職
米良街道	青山幹雄	県文化財保護指導委員
	安藤潤英	喜北小学校教諭
大肥街道	久枝敏	県文化財保護指導委員
	川崎満也	北郷小学校教諭
鶴戸街道	細田隆介	県文化財保護指導委員
	堀内和雄	袖津小学校教諭
志布志街道	前田博仁	大平小学校教諭
	井手義徳	有明小学校教諭

「歴史の道」調査報告書

昭和54年3月31日

編集 宮崎県教育委員会

発行 文化課

宮崎市橋通東1丁目9番10号

印刷所 酒匂印刷

飫肥

昭和五十四年三月
文化課

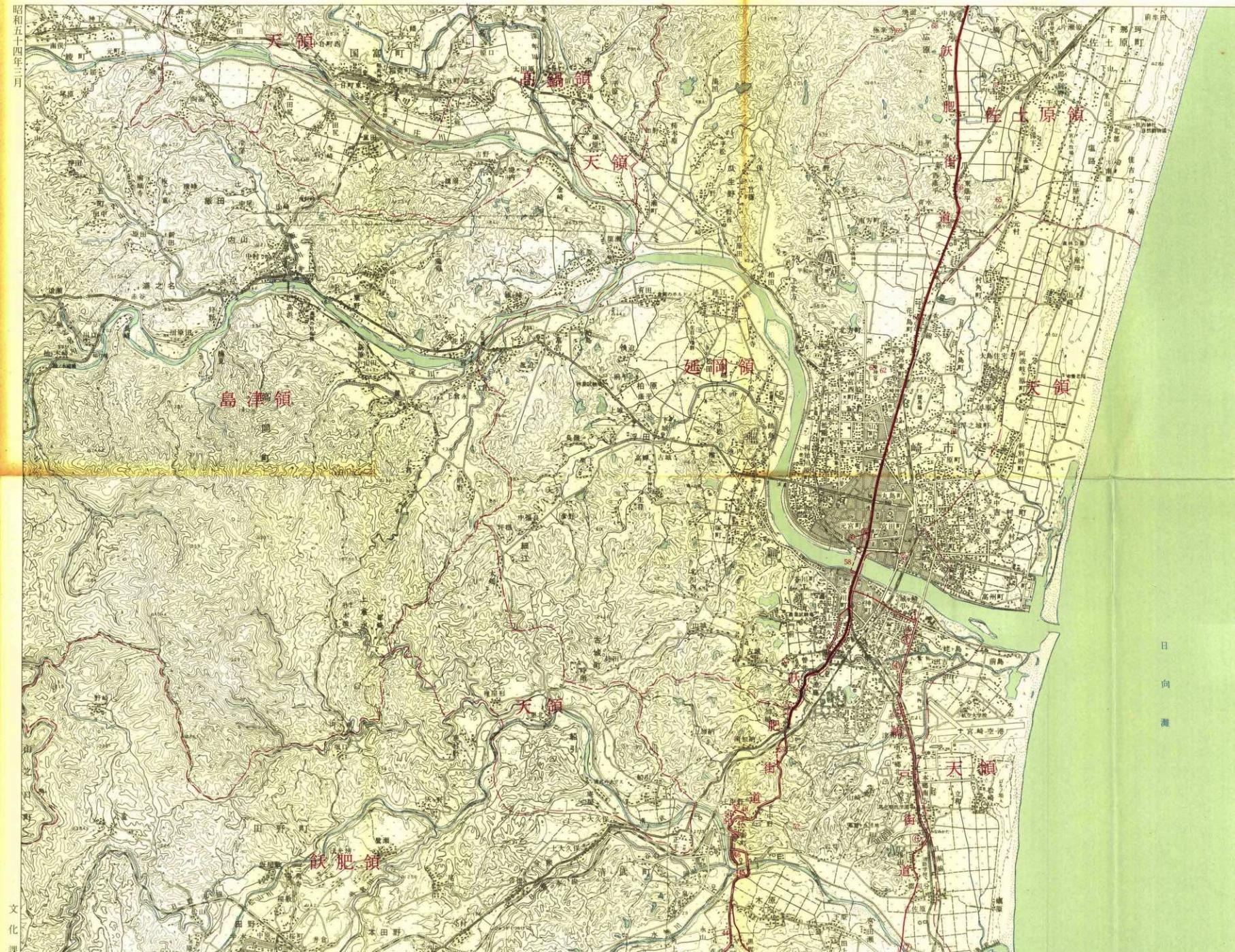


この地図は、建設省土地理院版の承認を得て刊行施行の5万分の1地形図を、複製したものである。(承認書明) 昭54 九種第118号。

原図: 地理院地図51B4-21 (昭54) 77-464 (宮崎アドバイザリーセンター)

宮崎

昭和五十四年三月



宮崎県歴史の道

肥沃街道	鶴戸街道
⑪ 黒坂の五輪塔	① 城ヶ崎の町並み
⑫ 上使橋渡し	② 宝泉寺
⑬ 新町の町並み	③ 城ヶ崎俳人墓地
⑭ 中野神社	④ 恒久神社
⑮ 中野の町頭所跡	⑤ 赤江酢本舗
⑯ 伊東氏累世傍幕	⑥ 加護神社
⑰ 安井軒軒田宅	⑦ 鬼塚の渡し
⑱ 平部崎南生家	
⑲ 中野の馬術訓練所跡	
⑳ 清武古墳	
㉑ オンソジの井泉	
㉒ 加納神社	
㉓ 深草橋	
㉔ 曽井城跡	
㉕ 大淀川の船渡し	
㉖ 溪頭水神	
㉗ 小戸神社	
㉘ 納印御観音	
㉙ 宮崎神宮	
㉚ 宮崎県総合博物館	
㉛ 花之島の水滸神	
㉜ 鹿児島池櫻穴群	
㉝ 新名爪の六地蔵尊	
㉞ 住吉古墳	
㉟ 広原の六地蔵尊	
㉞ 梶葉寺の仏像	

凡例

国	道
県	道
その他の道	
不明部分	
領	界

記

（略）

石	段	由	正當耕作
一、都、府、県			
二、道、府、支、支	支那地圖		計畫耕作
三、縣、郡、村、莊	單圖		小塊地
四、町、莊、村、區	段	竹	林
五、里、鄰、里、鄰	田		山地
六、地利用圖			
△△△ 三角形	△△△ 條石△	△△△ 田	△△△ 地
△△△ 地圖	△△△ 大地△	△△△ 竹林△	△△△ 林
△△△ 木標	△△△ 律石△	△△△ 木標△	△△△ 地

「この地図は、建設省国土地理院長の承認を得て同院発行の5万分の1地形図を、

複製したものである。（承認番号）昭54 九復第111- 号

1 : 50,000

販売 宮崎市鶴見町7丁目6-21 電 (0985)77-4111(直) 富士マイクロオービスセンター

日向青島

昭和五十四年三月



「この地図は、建設省国土地理院長の承認を得て同院発行の5万分の1地形図を、複製したものである。(承認番号)昭54 九根第 116 号」

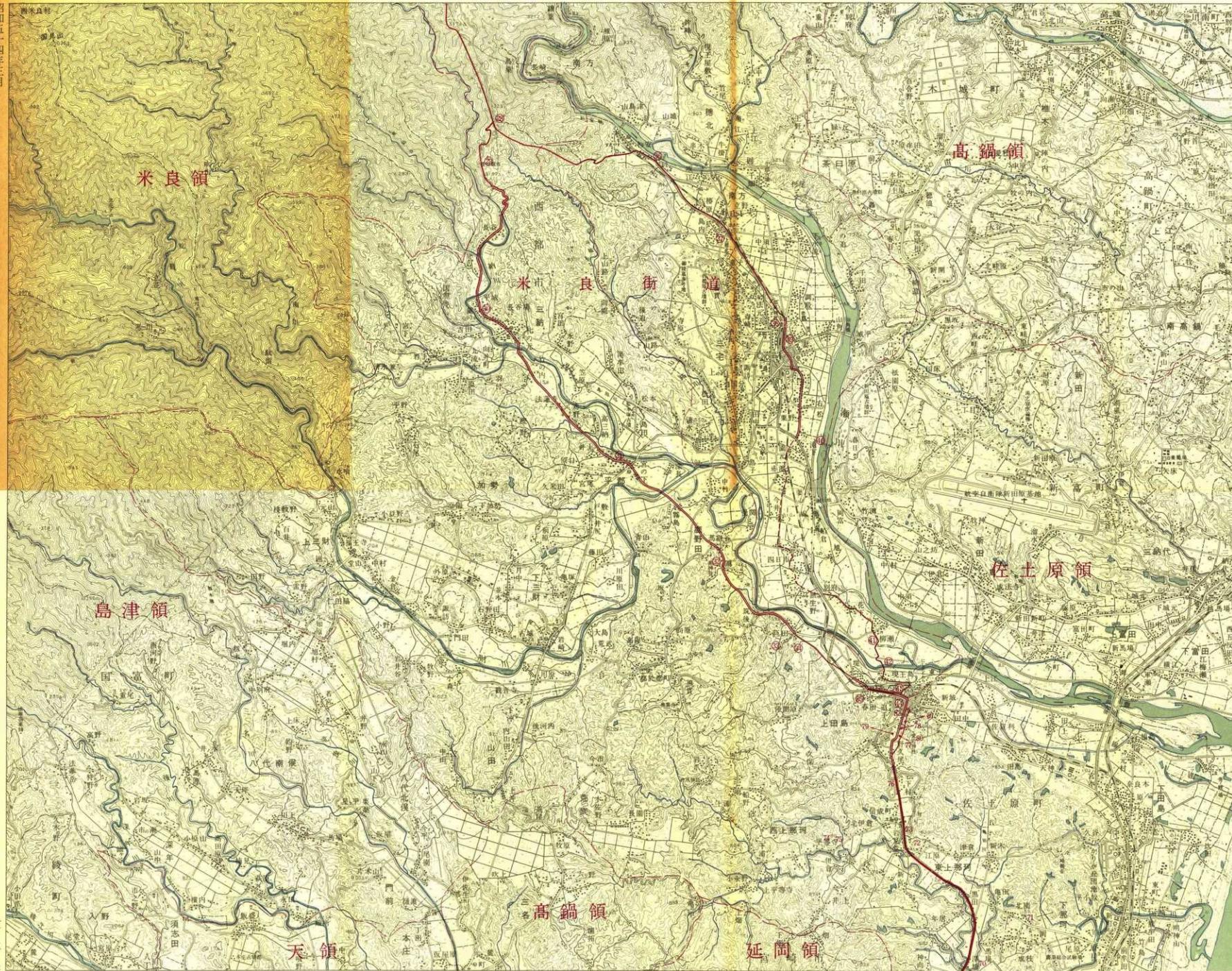
1 : 50,000

有効：宮城県道普通車と工具車-21 号 (03981) 77-AB6A (通) 富士マイクロホールディングスセンター

鷦肥街道	鶴戸戸街道
立野番所跡	加江田神社
綿の原神社	天神渡し
花立のお駕籠立ての場	青島
元仮屋の板碑	内海崎
元仮屋の桜並木路	内海港
関所の石柱	内海のアコウ
山仮屋の関所跡	笠巣の関所跡
イチイガシの巨木と水汲み場	伊比井越
鶴の原城跡	伊比井の絃塚
鶴の原の道標	馬の崎
潮嶽神社	漸平崎
宿野の五輪塔と六地蔵幢	漸平の城跡
王塚古墳	七人斬りの供養碑
朝倉茶屋	
山仮屋トンネル	
汗道	
椿崎の馬頭観音	
九平地の地蔵菩薩	
九平の道標	
双石山	
勢田峠	
勢田寺跡	
大堤の池塘修築碑	

妻

昭和五十四年三月



宮崎県歴史の道

米良街道	飫肥街道
⑧ 姫塚	⑦ 漫々橋
⑨ 長谷觀音	⑦ 蜂巣薬の六地蔵樟
⑩ 麗	⑤ 五郎神社
⑪ 根本寺	⑦ 夜泣橋
⑫ 潮神社	⑦ 平等寺の祠堂
⑬ 巨田神社	⑦ 平等寺觀音堂の五輪塔
⑭ 鴨越	⑥ 足取川板橋
⑮ 高月院	⑦ 野久尾の一里坂
⑯ 杉安瀬	⑦ 茶屋星跡
⑰ 南方神社	⑧ 曾日講跡
⑱ 都万神社	⑨ 愛宕神社
⑲ 妻本町	⑩ 佐土原口の旧道
⑳ 金九堰	⑪ 佐土原城大手門跡
㉑ 金九惣八屋敷	
㉒ 現王渡	
㉓ 西明寺	
㉔ 大手門前	

凡例

- 国 道
県 道
その他の道
不明部
領 界

三号